

追検査

平成三十一年度 学力検査 問題

国

語

(九時二十五分～十時十五分)  
(五十分間)

受検番号 第 番

注 意

- 1 解答用紙について
    - (1) 解答用紙は一枚で、問題用紙にはさんであります。
    - (2) 係の先生の指示に従って、所定の欄二か所に受検番号を書きなさい。
    - (3) 答えはすべて解答用紙のきめられたところに、はっきりと書きなさい。
    - (4) 解答用紙は切りはなしてはいけません。
    - (5) 解答用紙の「印は集計のためのもので、解答には関係ありません。
  - 2 問題用紙について
    - (1) 表紙の所定の欄に受検番号を書きなさい。
    - (2) 問題は全部で五問あり、表紙を除いて十四ページです。
- 印刷のはっきりしないところは、手をあげて係の先生に聞きなさい。

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(25点)

武蔵映像大学(ムサエイ)四年生の安原は、卒業制作(卒制)として、映画監督をすることに  
なった。「奈々」を演じる入田琴葉と、「羽田野」を演じる双海との、二人の撮影シーンがいよいよ  
始まった。

「もう一回、よろしくお願いします。」

原田がカメラを回し、俺はまた「スタート!」と声を張り上げる。

タオルで髪を拭きながら、奈々は部屋を見回す。真っ白なキャンバスや、その周囲に散らばった  
画材を。ベッドの上で丸まった布団やカーテンの色、本棚に並ぶ画集やスケッチブック。そして、  
台所に立つ羽田野の背中を。

オーディションに入田琴葉が現れたとき、確かに奈々が目の前に現れたのだと思った。ところが  
今、彼女は緊張して、戸惑って、自信なさげで、完全に入田琴葉という役者を志す学生になってし  
まっていた。

カットをかけ、入田さんにもう一度同じ話をする。それを何度か繰り返したところで、橋本が  
「ちよつと休憩を入れよう。」と提案してきた。入田さんの演技がどんどん悪くなっていくのを感じ  
ていたから、それに乗ることにする。

「なあ安原。」

橋本が、声を潜めて今日の分のスケジュール表を差し出して来る。

「この調子でいくと、終わらないぞ。」

橋本の目がちらりと入田さんの方に向く。彼女は立ち位置から離れることなく、台本を片手に演  
技の練習を続けていた。

「昨日と一昨日は、ぎりぎりスケジュール通り収められた。でも、あんまりじっくりやってたら時  
間なんてあつという間になくなる。」

及第点のものは撮れただろ。早く次のカットに行こう。橋本の目はそう訴えていた。昨日も一昨  
日も、橋本にこんな顔をさせた。でも、今日の方がずっと切実だ。

「俺だって監督に納得いくものを撮ってほしいけど、俺は現場の進行だって大事にしたい。」

それは、現場を切り盛りする助監督として正しい意見だ。でも、ほいほいとそれに従うことはで  
きない。やると決めたことがある。

「ごめん、でも……。」

言いかけて、言葉に詰まった。部屋の隅で休憩していた双海さんがぬつと立ち上がり、俺と橋本  
へと近づいてきたからだ。

「俺も、助監さんと同意見なんですけど。」

首にかけていたタオルで額を拭いた彼は、険しい顔で俺を見据える。

「自分が気に入るものが撮れるまで何度もやるのは結構ですけど、それって本当にクオリティアッ  
プのためですか? 監督の自己満足のためじゃないんですか?」

双海さんは、俺より少しだけ背が高い。視線が高い。顎を上げて、さらに高いところから見下ろ  
してくる。彼に何と言いつ返せばいいのか、言葉を探した。

「自分の作家性なんてものを人質に、周りに無茶を強制してるだけじゃないですか?」

大学生風情が「作家性」なんて笑わせるな。双海さんが言外にそう言っているのがわかる。その一  
瞬のカメラの動きに、何の意味がある。それが客に伝わると思うか。それがなかったら作品は駄作

になるのか？ 客はそんなことに気づいてくれない。そのために時間を消耗し、スタッフを疲弊させてどうする——そんな風に。

「大体、彼女はそれについて来れないと思いますよ。」

双海さんが親指ですつと差したのは、入田さんだった。ずっと台本を見下ろしていた彼女ははつと顔を上げ、おろおろと立ち上がる。

「なあ、あんたはどうしてオーディション受けたの。」

淡泊な声で、双海さんは入田さんに問いかける。

「素人同然の癖に、どうして大学で大人しく授業受けなくて他大の卒制に参加しようと思ったんだって聞いてんの。」

答えなどさらさら聞くつもりがないのか、双海さんは「えーと……。」と固まった入田さんから俺へと視線を戻した。

「監督が頭の中に思い描いてる理想を実現するのは、彼女じゃ無理ですよ。」

いい加減気づけよ。そしてもつと効率よく撮影を進めろよ。そんな顔で双海さんは俺を睨みつける。狭いアパートの中、双海さんの声が聞こえていないスタッフはいなかった。全員が動きを止め、こちらを凝視している。

「あの、双海さん。」

さすがにここまでのごことは予想していなかったのだろう。橋本が俺と双海さんの間に入って状況をどうにかしようと試みる。

けれど、橋本よりずっと早く動いた人間がいた。

「すみません、双海さん。まだ撮影三日目ですし、順調にいかないのはご勘弁を。」

アパート内の緊張した空気を吹き飛ばすように、からっとした笑顔で北川は双海さんの肩を叩く。それを振り払うように一歩後退した双海さんは、さらに顔を強ばらせた。

「あんた、プロデューサーなんだろ。」

双海さんは牙を引つ込めることなく、それを北川に向ける。

「監督の手網握るのがあんたの仕事じゃないの？」

「握ってますよ。」

涼しい顔で、北川は答えた。② 対する双海さんは、虚を突かれたように目を丸くする。

「ばつちり握ってますよ。これはいただけないって思ったら全力で引つ張る気満々です。」

犬のリードを引つ張るような仕草をする北川に、双海さんの声が凄みを帯びた。

「あんたは、これでいいと思ってるのかよ。」

「思ってるから、隅っこで大人しくしました。」

本気かよ。双海さんの口がそう動く。

「プロデューサーならわかってるだろ？ こんな調子で監督が気に入るまで何度も何度も何度もテイクしたら、来週中に撮影なんて終わるわけがないって。」

ムサエイの卒制の撮影期間は九月いっぱい。でも、一カ月間ずっと撮影ができるわけじゃない。

そんな予算はとてもない。「終わりのレイン」は短期集中で撮影を終わらせようと、九月上旬から中旬にかけての二週間を使い、撮影するスケジュールになっている。

まだ三日目だけれど、果たして間に合うのだろうか。そんな風に双海さんや橋本が考えてしまうのは、わかる。俺だって考えないわけではない。

だから、北川が止めない限り止まらなくていいのだと、そう自分に言い聞かせて来た。

「正直、リテイクばかりでしんどい現場だとは承知してます。でもこれは監督が暴走してるわけじゃなくて、プロデューサーの僕と、監督の安原の、二人の総意です。」

双海さんの横でそれを聞いていた橋本が、困ったように唇をねじ曲げる。北川の言葉は双海さんに向けられただけのものじゃないとこのアパートにいる人間全員がわかっているから、誰も何も言わなかった。

ちらりと、北川が俺を見てきた。北川は何も言わず、双海さんへと向き直る。

「双海さん、安原は自分が気に入るものが撮れるのを待ってるんじゃないかって、ただ純粹に『本物』を探してるだけなんですよ。」

本物。本物です、本物。繰り返す北川に、思わず彼の顔を覗き込んでいた。

「僕等が撮ってるのって、間違いなくフィクションの映画ですけど、カメラが回ってる間だけは、カメラの中はノンフィクションじゃないといけません。双海さんと入田さんがフィクションの羽田野と奈々である限り、安原は絶対にOKは出さないとすよ。」

頑張ってくださいね。そんな顔で北川が笑うのを、双海さんは目の奥に確かな怒りを宿して見つめていた。今にも北川にかみかかるといじゃないか。そうになったら俺はどうするべきだろう。そんな風に考えたけれど、杞憂<sup>③</sup>だった。双海さんは苛立<sup>いらだ</sup>たしげに肩を竦<sup>すく</sup>めると、北川と俺を交互に見た。

「映画が当たったらみんなのおかげ、転けたら主演のせい。」  
じつとりと熱された部屋の空気に滲<sup>にじ</sup>むような、そんな声で。北川が怪訝<sup>けげん</sup>な顔で「え？」と首を傾<sup>かた</sup>げたが、双海さんは構わず続けた。

「監督一人で映画撮ってるつもりになつてんじゃないよ。」

投げるだけ投げて、ぶつけるだけぶつけて、それ以上は何も言わず、双海さんは休憩の際の定位<sup>せい</sup>置として使っている部屋の隅の箱馬<sup>※</sup>へと移動する。ペットボトルの水を呷<sup>あ</sup>り、「話しかけないでくれ。」というオーラを全身から発しながら、台本を捲<sup>めく</sup>る。

「あのう……。」  
はっと顔を上げると、入田さんが俺と北川の近くまで来ていた。恐縮した顔で体を縮こまらせ、ゆつくり頭を下げる。

「ご迷惑をおかけして、本当にすみません。次は頑張ります。」

何度も何度も頭を垂れる入田さんに、「いやいやいや」と北川と一緒に首を横に振って、撮影は再開した。

「安原。」

カメラの前に立った原田が、「聞きたいんだけど。」と改まった様子で箱馬に座る俺を見下ろしてきた。

「さっき北川が言ったことって、あんたも同意見なの？」

「えーと……どれのこと？」

「カメラが回ってる間だけは、カメラの中はノンフィクションじゃないといけない」って。ああ。口を半開きにして、俺は改めて北川を見た。さっきはそれどころじゃなかった。今、改めて北川の言葉を胸の内でも繰り返す。刻みつけるみたいに反芻<sup>はんすう</sup>する。

自分の拙い言葉で必死に伝えようとしてきたこと。それがいとも簡単に、わかりやすい言葉になつてそこに存在していた。

真っ直ぐ自分を見てくる原田に向かって、俺は大きく頷<sup>うなづ</sup>いた。

「北川の言う通りだ。俺は、カメラの中がノンフィクションになるのを待ってるんだ。」

「そっか。」

どうして俺にはこれが言えなかったのだろう。自問する俺を差し置いて、原田は「すっきりした。」と笑顔でファインダーを覗いた。

「結構いいものが撮れてる気がしたのに、安原がどういつもりでリテイクするのかわからなくなってたから。そういうことなら、私は心置きなくカメラを回せる。」

準備OKだよ。そう言う原田に、俺は堪らず自分の胸に手をやった。痛みがあるわけではない。でも、体を巡る血液がざらついた砂に姿を変えてしまったような、直視しがたい違和感がある。確かにある。

「それでは、よろしくお願いします。」

双海さんは俺を見なかった。入田さんは「はい」と上擦った声で返事をした。周囲のスタッフ達を見回し、目で改めて合図を送る。役者が位置に着き、カメラが回る。俺は大きく息を吸った。自分達はフィクションを作っている。けれどこの言葉の先は、間違いなくノンフィクションでなければならぬ。

⑤「スタートっ！」

(額賀藩著「完バケー」による。一部省略がある。)

(注) ※プロデューサー……映画や演劇、放送などで、作品や番組の製作責任者。

※箱馬……高い所の物を取る時などに使う踏み台。

問1 橋本が「ちょっと休憩を入れよう。」と提案してきた。とありますが、橋本はなぜこのように提案してきたのですか。最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(4点)

ア 映画の出演者が疲れ果てており、休憩を入れることで少しでも体を休めてもらいたかったから。

イ 映画のスタッフ全員が監督に不満を感じていることがわかり、代表してその不満を伝えたかったから。

ウ 監督の目指しているものがわからず、監督が何を望んでいるのかをもう一度確認したかったから。

エ 映画の撮影が滞っているため、予定どおりに撮影を進めるように、監督を説得したかったから。

問2 ② 対する双海さんは、虚を突かれたように目を丸くする。とありますが、これは双海さんのどのような様子を表していますか。次の空欄にあてはまる内容を、十五字以上、二十五字以内で書きなさい。(6点)

北川の返答が、	
25	様子。
15	



2 次の各問いに答えなさい。(22点)

問1 次の――部の漢字には読みがなをつけ、かたかなは漢字に改めなさい。(各2点)

- (1) 寸暇を惜しんで勉強する。
- (2) 辣腕をふるう。
- (3) 計画の指揮を執る。
- (4) 待ちに待ったロウホウが届く。
- (5) 彼にはもっと積極性がほしい。

問2 次の――部「そうだ」と同じ意味(用法)であるものを、あとのア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(3点)

玄関の荷物は、奥の部屋へ運ぶそうだ。

- ア 明日は寒くなるそうで、雪が降るかもしれない。
- イ 姉が食べているケーキは、とてもおいしいそうだ。
- ウ ある程度の人数が集まりそうな気がする。
- エ 少年がとても楽しそうに公園で遊んでいる。

問3 次の会話の空欄にあてはまる四字熟語を、漢字で書きなさい。(3点)

Aさん「説明をする際、話が長くなってしまい、何が大切なのか相手に伝わらないとき  
があります。」

Bさん「確かに  に話した方がよいときがありますよね。」

Aさん「余計な前置きをせず、いきなり本題の要点に入るとい意味ですね。」

問4 次は、中学生のAさんの学級で、小学生に向けた「学校案内リーフレット」について話し合いをしている様子と、その話し合い後に修正した「学校案内リーフレットの一部」です。これらを読んで、あとの問いに答えなさい。(各3点)

話し合いの様子

司会「これから学校案内リーフレットに書かれている内容について話し合いを行います。何かあったら発言してください。」

Aさん「『主な行事』と『小学校とちがうところ』が分けて書かれていて、とても読みやすいと思います。」

Bさん「『主な行事』のところですが、わかりにくい点があると思います。」

司会「わかりにくい点はどこですか。」

Bさん「行事名です。この書き方では小学生にとっては何のことなのかわからないかもしれません。」

I というのはどうでしょうか。」

司会「Bさんから発言がありました。Cさん、どう思いますか。」

Cさん「そのように直すとわかりやすいですね。ただし、中学生になったらみんなが使うようになる言葉だと思うので、かっこをつけて書くというのはどうでしょうか。」

Aさん「それはいい考えですね。私もその意見に賛成です。両方とも書かれているとリーフレットを読む小学生にもわかりやすいと思います。」

司会「では、『主な行事』については、I というだけではなく、かっこをつけて

両方とも書くという、Cさんの発言のように修正したいと思います。」

【学校案内リーフレットの一部】(話し合い後に修正したもの)

## 〇〇中学校へ ようこそ!

小学生のみなさん、こんにちは。

今日は、生徒会による中学校生活のしょうかい後、授業見学や部活動見学をしてもらう予定です。

中学生のがんばる姿をたくさん見てください。

### 主な行事

- 一学期： 入学式 対面式 生徒総会  
三年生修学旅行  
学校総合体育大会(学総)
- 二学期： 体育祭 合唱祭  
生徒会本部役員選挙
- 三学期： 一年生スキー教室  
二年生校外学習  
三年生を送る会(三送会)  
卒業式

### 小学校とちがうところ

- ① 教科の名前がちがうものがある。
- ② 教科ごとに担当の先生が変わる。
- ③ テストには、中間テストと期末テストがある。
- ④ 部活動がある。  
→部活動のしょうかいは次のページにあります!

(1) 話し合いと「学校案内リーフレットの一部」の内容をふまえて、空欄  I  I には、同じ言葉が入ります。

(2) ただし、中学生になったらみんなが使うようになる言葉だと思うので、かっこをつけて書くというのはいかがでしょうか。とありますが、この発言について説明したものととして最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 相手の意見をふまえて新たな内容を提案している。
- イ 相手の意見をわかりやすい言葉で言い換えている。
- ウ 相手の意見を尊重しつつわからない点を質問している。
- エ 相手の意見と自分の意見との共通点を挙げている。

### 3 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(25点)

まず言葉は、事物を概念で括<sup>くく</sup>って抽象化するはたらきであるということ。このことには異論の余地がないでしょう。

たとえば、「あなたのお父さんはどんな人ですか」と聞かれたとき、言葉でそれを説明しなくてはならないとします。あなたは相手にできるだけ正確なイメージを与えようと思って、年齢、身体的特徴、仕事、趣味、性格など、あらゆることを話します。しかし、「百聞は一見にしかず」、五時間かけて説明したとしても、じかに五分間会うほうが、相手ははるかにあなたの父に対する確かなイメージを得るでしょう。これは、言葉というものが、概念によって構成されているからで、具体物そのものをそのままに指し示すことができないからです。「あ、犬がいる」と言うとき、話者は、現に具体物としての犬を見てどんな犬であるかを感じてとして確実につかんでいます。「犬」という言葉を使ったとたんに、それを見ていない人には、それがどんな犬であるかまでは伝わらないことに気づきます。もちろん、その犬の具体的な特性をいくらか細かく説明しても、その説明が言葉であるかぎりには、ついに具体物としての「この犬」には到達できません。これが抽象作用としての言葉というものの宿命なのです。

このように、言語表現は、表現すること自体によって、それが表そうと思っている当の实在や経験との間に必ず何がしかのすれ、距離を生み出してしまうことが避けられません。

こうして言葉は、それが抽象作用、概念化作用であることによって、必然的に虚構性を持つのです。

第二に、言葉は、それが語られるとき、時間に沿ってラインを引いていくように語られるほかにないという特性(制約)をもっています。これを言葉の「線型性」と呼びましょう。

たとえばあなたが、春の宵、公園ではらはらと散る桜の花に包まれて、その美しさはかなさに、これまでになく深い感動を味わったとします。この感動は言語以前の身体感覚あるいは情緒としてあなたの全身を押し包みます。それはあなたがいまいる空間との一体化であり、そこには日常を流れるリニアな(時計的、カレンダー的な)時間感覚を超越した場が開かれています。

時間が消えているわけではありません。むしろあなたがこれまで生きてきた長い時間のすべてがうっとりとしているあなた自身の情緒世界そのものうちに凝縮しているのです。あなた自身の生活史の凝縮が「いまここ」になれば、散りゆく桜の美しさはかなさに感動することはありえないからです。

さてあなたはその感動を言葉で表現しようと思つたとします。散文で語るのもよいし、歌に詠むのもよいでしょう。しかし、それに成功するには、高度な言葉の技巧が必要とされます。なぜ高度な技巧が必要とされるのでしょうか。そこに立ちふさがっているものこそまさに、感動の直接経験が持つ全体性と、言葉の線型性とのいらだたい矛盾なのです。

「昨夜、近所の公園で桜がはらはら散る光景に出くわしたが、そのなんともいえない美しさに私は、いのちのはかなさを感じ、しばし、時を忘れてうっとりとしていた。私も長く生きてきたが、こんな感動を味わったのは初めてで、おそらくあのとき、自分の来し方を振り返る心境とたまたま出会ったその光景が醸<sup>か</sup>す雰囲気とが不思議に一致したのだろう。」

③ ここでは、感動の全体性そのものをまるで伝え切れていません。順次説かれた秩序ある「説明」になつている分だけ、世界とあなたとの混沌たる融合の瞬間は損なわれています。

美的感動に限らず、およそ世界経験というものは、すべてが同時多元的な混沌の連続的な継起として現れます。言葉は世界経験を伝達する使命をもっていますが、この混沌をそのまま伝えることはもともと不可能で、言語規範にしたがつて線状に、ひと筋にひもといっていくほかはないのです。

こうして、言葉の線型性は、特別の技巧や繊細な配慮なしには、そのつどそのつどの人と世界とのかかわりの全体性を毀す可能性が高いのです。

何か複雑な事情を人に話すとき、何から話し始めたらいかが相当ためらうことがあるのを、多くの人が経験しているでしょう。それは、感得された経験や自分の情緒の中心がどこであるかは、本人には十分わかっているのに、いきなりそこから始めたのでは、聞き手には何のことやらわからないからです。

第三に、言葉は、世界を分節し、切り分けることによって、私たち自身に分類体系としての世界像を新たに与えます。

ある対象を「犬」と呼んだとき、それは同時に「猫や狐や狼や羊ではないもの」という規定をもなっています。つまり、ある対象をかくかくの音韻で確定することは、ただちに他の対象と比較する行為なのであり、「それは他の対象ではない」という否定判断を含んでいます。「そんなことはやめてください」というお願いは、同時に、相手の行為を承認しようとする自分の意志を否定することです。

このようにして、ある言葉は、それに隣接する他の概念や文意との差異と相互否定の関係によってのみ、一定の意味作用として浮かび上がることになります。私たちは言語行為において、いわばあるものごとをあるものごととして措定しつつ、つねに同時に「それらではなくてこれ」という否定行為をやっているのです。これが「言葉は世界を分節し切り分ける」ということの意味です。

ところでソシュールは、この切り分けによる分類体系の成立は、文化によって「恣意的」であると考えました。

虹が文化によって三色に分類されたり七色に分類されたりするように、対象世界を言語によって把握・認識する(分節し、切り分ける)その仕方そのものが、文化によって異なるという意味です。

この考え方によれば、対象は同じだが対象につける名前がバラバラ(恣意的)であるというのではなく、対象世界を言語によって把握し掬い取る人間主体自身の認識作用それ自体が恣意的であるということです。

もちろん恣意的といっても、それは個人によってバラバラだという意味ではありません。それではそもそも一定の共同体内で言語が疎通するはずがありません。ここでは一定の言語共同体が蓄積してきた歴史がそれぞれ多様であるということが言われているのです。だから私たちは、ある言葉によってだれにとっても同一な唯一の实在を捉えているのではなく、实在の捉え方そのものが、それぞれの言語共同体によって「恣意的」なのです。

さらに、この「恣意性」という概念にかかわってもっと大事なことは、そういう言葉による認識の恣意性は、自然から追放され自然に向き合って文化を形成してきた人間の普遍的な本性を物語っているということです。言い換えると、この場合にも、人間は言葉の世界を生きることに<sup>⑤</sup>おいて、対象世界をそのまま映しているのではなく、むしろたえず世界を虚構しているのです。

(小浜逸郎著『日本語は哲学する言語である』による。一部省略がある。)

(注) ※ソシュール……スイスの言語学者。(一八五七—一九一三)

問1 抽象作用としての言葉というものの宿命 とありますが、これはどのような宿命ですか。その説明として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

(4点)

- ア 言葉の発し方によって、相手との虚構性が築かれていくという宿命。
- イ 言葉には限界があり、具体物そのものを示すことができないという宿命。
- ウ 正確なイメージを伝える言葉の表現が、無数に存在してしまうという宿命。
- エ 文化によって、言葉の概念というものが様々に違っているという宿命。

問2 感動の直接経験が持つ全体性と、言葉の線型性とのいらだたい矛盾 とありますが、筆者は、どのような点に矛盾があると考えていますか。次の空欄にあてはまる内容を、三十字以上、四十字以内で書きなさい。(6点)

感動の直接経験は、

40		30
----	--	----

という点。

問3 これでは、感動の全体性そのものをまるで伝え切れていません。とありますが、伝え切れていないのは、どのようなものが欠けているからですか。本文中から探し、十一字で書き抜きなさい。(5点)

問4 文化によって「恣意的」である とありますが、この説明として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(4点)

- ア 対象を音韻で確定することによって、他の対象と比較している。
- イ 言葉の関係性によって、一定の意味作用を浮かび上がらせている。
- ウ 共有する言語によって、把握の仕方はそれぞれ異なっている。
- エ 個人の歴史が多様であることによって、様々な実在を捉えている。

問5 ⑤ 世界を虚構している とありますが、筆者は、「世界を虚構している」とは、どのようなことだと考えていますか。次の空欄にあてはまる内容を、言葉、認識の二つの言葉を使って、三十字以上、四十字以内で書きなさい。ただし、二つの言葉を使う順序は問いません。(6点)

	人間は、	
40		30
というごと。		

4 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(……の左側は口語訳です。)(12点)

白河院の御時、九重の塔の金物を、牛の皮にて作れりといふこと、世に聞えて、修理したる人、

定綱朝臣、ことにあふべき由、聞えたり。仏師ながしといふもの召して、「たしかに、まこと、処罰されるに違いないという話

仏師の誰それ

そらごとを見て、<sup>①</sup>ありのままに奏せよ。」と仰せられければ、承りて、上りけるを、なからの

ほどより、帰り下りて、涙を流して、色を失ひて、「身のあればこそ、君にも仕へ奉れ。お任せ申し上げることができぬ

肝心失せて、黒白見分くべき心地も侍らず。」といひもやらず、わななきけり。君、聞こしめして、

笑はせ給ひて、ことなる沙汰なくて、やみにけり。

時人、いみじきをこのためしにいひけるを、頭隆卿聞きて、「こやつは必ず冥加あるべきもの

人々 当時の 大変恩かな話

神仏の加護

なり。人の罪蒙るべきことの、罪を知りて、みづから、をこのものとなれる、やんごとなき

A

思ひはかりなり。」とぞほめられける。

愚か者

見事な

まことに久しく君に仕へ奉りて、ことなかりけり。

B

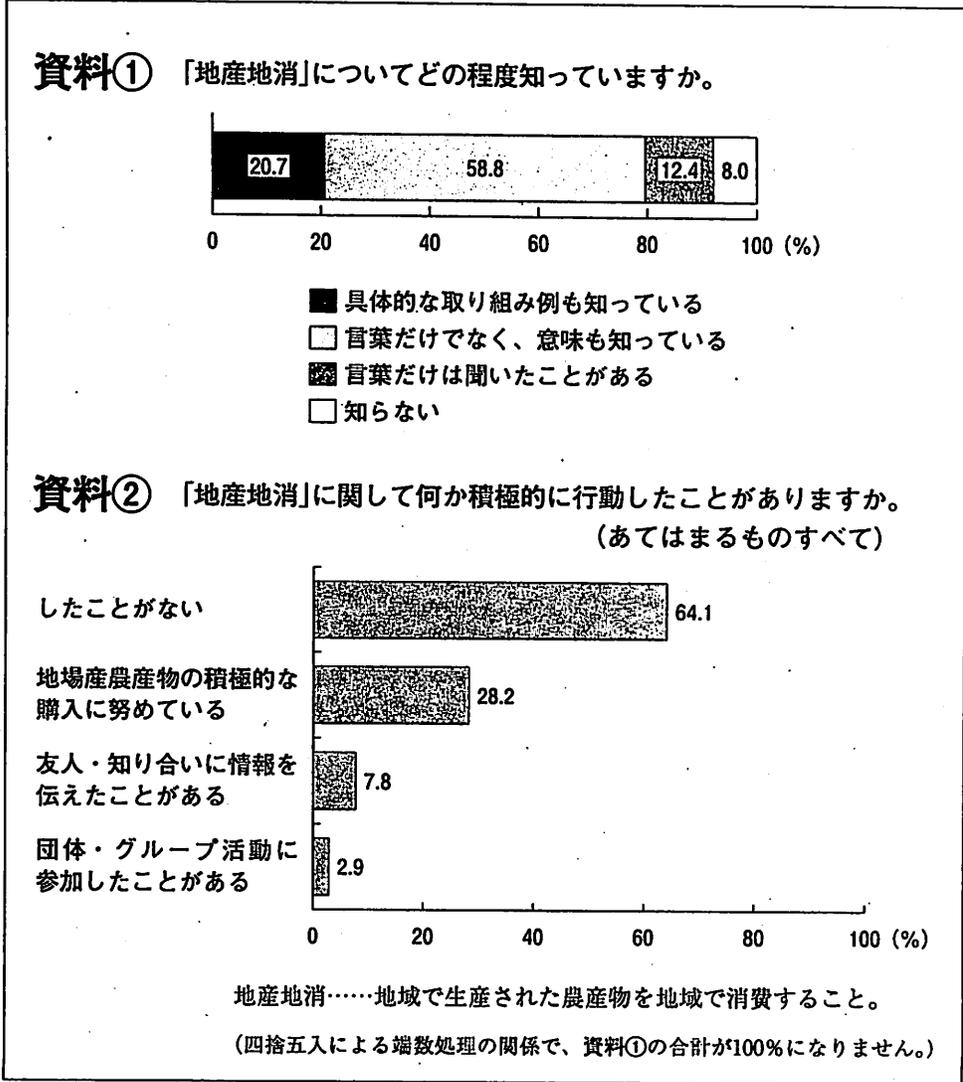
〔十訓抄〕による。一部省略がある。(



5 次の資料は「地産地消」について、県内在住者を対象に調査し、その結果をまとめたものです。

国語の授業で、この資料から読み取ったことをもとに「地産地消」について、一人一人が自分の考えを文章にまとめることにしました。あとの(注意)に従って、あなたの考えを書きなさい。

(16点)



埼玉県「第59回アンケート「埼玉県産農産物について」」から作成  
(平成29年調査)

(注意)

- (1) 段落や構成に注意して、自分の体験(見たこと聞いたことなども含む)をふまえて書くこと。
- (2) 文章は、十三行以上、十五行以内で書くこと。
- (3) 原稿用紙の正しい使い方に従って、文字、仮名遣いも正確に書くこと。
- (4) 題名・氏名は書かないで、一行目から本文を書くこと。

(以上で問題は終わりです。)



